

わたしの キャリアストーリー

福岡医健専門学校児童福祉科を卒業後、5年間障がい者の訪問介護事業所で勤務。その後、当法人へ入職、福岡市南区の特別養護老人ホームシティケア長住の介護員として配属。現在は同施設の生活相談員として勤務。



「その人らしさ」が発揮できる場をつくる

もともとは児童福祉に興味があったのですが、実習などを経て障がいの分野に興味を持ち、障がいがある方へのホームヘルパーとして就職しました。その後「福祉全般を学びたい」とシティ・ケアサービスへ転職しました。障がい分野の在宅から高齢分野の施設への転職だったので、同じ福祉でもその違いに戸惑いはありましたが勉強になりました。

障がい分野の在宅では「これから何十年と在宅で生活するために自立を促す」を重点に置き、「出来るだけ手を出さない」ことを意識していました。高齢分野の施設であるシティケア長住では「これからの限りある時間をいかにその方らしく過ごしていただくか、そのために手を差し伸べる」を重点に置いてきました。特養は共同生活であり、自ら望んで入られた方はいないと思います。また「あたりまえの生活」でもありません。その中でも「自分の時間」をみつけ「その人らしさ」が発揮できる場をつくることを心掛けています。

介護スタッフから生活相談員へ 広い視野と言葉の大切さを実感

入職5年目で介護スタッフから生活相談員へ異動となったのですが、異動は自ら希望しました。生活相談員になってみると、介護スタッフの時は見えなかったものがたくさん見えるようになりました。ご利用者様ご家族様だけではなく、病院やケアマネージャー、他事業所、地域の方など施設以外での接点が増えることで、様々な視点や立場、考え方を知ることができました。そうすることでより客観的に物事を見ることができ、広い視野を持てるようになりました。また、私の発する「言葉」が相手にどう伝わるか、を強く意識するようになりました。言葉を通して情報を伝えますが、伝わり方次第で印象や内容が全く異なることもあります。改めて言葉の大切さと、伝える難しさを知りました。

「その先の『生活』を支えきる」そのために生活相談員ができること

当施設にはショートステイもあるのですが、ある時上司であるマネージャーが「ショートステイのご利用者はご自宅での生活が基本。その対応で、ご本人様のご自宅での生活が困るようにならない？」と訊かれました。ドキッとしました。今、目の前のご利用者様のためにと思って支援をしていましたが、マネージャーはその先の自宅での生活を見ていたんです。目の前のご利用者様の「身体」だけではなく、その先の「生活」を支えきることが大切だと教えて頂きました。上司や同僚から、また研修で色々なことを学び、視野がだんだん広がってきたと思います。この学びを介護、看護、リハビリ等の多職種と共有し、どう実践していくか、そのために生活相談員として何が出来るかを考えるようになりました。

法人の理念「ノーマライゼーションの実現に向けて」を实践

これからもずっと、ご利用者様と関わっていきたいです。さらにこれからは地域にも目を向け、「認知症があるから」「障がいがあるから」ではなく、誰もが「あたりまえの生活」を送れる地域や環境づくりをしたいです。当法人の理念でもある「ノーマライゼーションの実現に向けて」を实践したいですね。